

エンジェル伝説～after ～

やきたまご

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて月間少年ジャンプにて連載されていたエンジェル伝説が帰ってきた！

ACT・1〜ACT・4

竹久優二がヒロインになって本編第一話から開始される展開に!?

ACT・5

平山郁子、黒田清吉に惚れる!?

二人の行く先はどうなる!?

ACT・6

白雲の児島が碧空に転校してきた!?

まさかの児島VS幾野 実現!!

A C T . 7

禁断のシナリオ!

生徒会長の黒魔術により北野君が本物の悪魔と化した!
校内の強豪生徒たちが次々と倒されていく!!

マイナー作品だけど、作者好きなのよ。

目次

A C T. 1 伝説のリメイクの巻

1

A C T. 2 竹久と良子の衝突の巻

11

A C T. 3 北野君はどこから来たのか

い?の巻
——
21

A C T. 4 暴走する竹久の巻 | 31

A C T. 5 平山郁子の初恋の巻

40

A C T. 6 児島来たるっ!の巻

54

A C T. 7 悪魔と化した北野君!の巻

ACT. 1 伝説のリメイクの巻

某県某市にある碧空高校。ここには最凶の番長北野誠一郎が通っている。ある日の二人の生徒の会話において、

「お前、北野を好きなのか？」

茶髪のおかっぱ頭の美少女が金髪の不良少年に尋ねた。

「はあ？ いきなり何言ってるんだ茶くそ女？」

「私は茶くそ女ではない、白滝幾ニだ。いいから質問に答えろ」

「……北野さんは好きって言うよりかは、かけがえのない存在だ。なんでてめえにこんなこと言わなきゃいけないんだか」

「なるほど、てつきりお前に同性愛の気があるもんかと思っただぞ」

「ふざけたこと抜かすなこのアマあ!!」

「だから私は白滝幾ニと言っておるだろう。お前にも竹久優二と名前があるように名前を読んでだな」

竹久は、白滝を無視してどっかへ行ってしまった。

ところかわり竹久の家、竹久はベッドで眠りにつこうとしていた。

「つたく、あの女ふざけたこといいやがって」

ぶつぶつと独り言を言いながら眠りについた。意識が遠くなる感覚を覚え、気がつけば朝になっていた。

「なんだかあんまし寝た気がしねえな」

竹久は何か自分の体に違和感を覚えた。胸のあたりがいつもより重い感じである。なにげなく自分の胸に手を当ててみた。

「!？」

予想だにしない感触があった。膨らみがあり、ふかつとした柔らかさがあった。竹久は着ていたパジャマを脱ぎ、体を確認した。

「ど、どうなってるんだ——っ!!」

竹久の体は女となっていた。

竹久はまだ現実を受け入れていない状態だったが、それでも落ち着いて現在の状況を分析できる状態となった。まず名前は竹久優子と女っぽいな名前となっていた。体自体は変化したが、容姿にそこまで変化はない。髪の色が茶色いことや、カレンダーで月日を確認したところ、どうやら入学式あたりの時期らしい。竹久はとりあえず学生服に着

替えて登校することにした。

「スカートつていうのがどうも慣れないな。スースーして脚の辺りが不安になるぜ」

竹久は入学式の話を意識半分で聞きながら、今後どうしようかと考えていた。過去の記憶を思い出し、入学式の後、黒田のところへ行ったのを思い出した。黒田達がいつも固まっている場所へと向かう。

「ついに来たぞ——！ ついに俺の時代がやってきたのだ——ツ！」

「やりましたね黒田さん。つに最上級生つスよ！」

「これで俺達でかい面できますよ！」

遠くから黒田と取り巻きの二人の声が聞こえてきた。遠目から見ても、この三人はなにも変わりがないことを確認できた。

「おおいかった。相変わらずへんぴな場所にたまってんだな」

黒田達が竹久の存在に気付いた。

「はじめましてかな、黒田と取り巻き二名。俺は竹久優……優子。とりあえず挨拶しとくぜ」

黒田達は驚いた。茶髪のとゲとゲ頭、眉もそってあり、俺口調。完全にヤンキーの入った女が自分たちの元に来たからだ。

「す、スケ番だ……この展開は予想してなかったぜ。だが、スケとはいえ上に立つ者とし

て、威張ることができず！　しかし俺様の名前を知っているとは光栄だな！　がはははは!!」

黒田がバカ笑いをして浮かれていた。

「あの、黒田さん、俺ら少し舐められてますよ。一年の女とはいえ、ここは上級生としてガツンと言つてやらないと」

「そうだな、ごほん！　優子ちゃん、まあ我々も上に立つ者として色々とうるさいこと言うときもあるかもしれない。いや、今うるさく言つておくべきか。一応上級生だから敬意をもってだな」

「悪いな。俺あんたの話を聞くために来たわけじゃねーんだ。知っている奴がどんな感じになつているか確認しただけだ。後、番長の座は転校してくる北野さんって方のものになるから、今のうちに番長気分を味わっておくがいいさ」

竹久は黒田を無視してスタスタと立ち去つていこうとした。しかしそれを邪魔するかのよう生活指導の岸田がやってきた。

「！　なんだ、お前見ねー面だな。この学校で女の不良とは珍しい」

「ようハゲの岸田」

「あ？　俺が気にしている事を言うとは良い度胸しているなこのスケは。この学校でそんな口聞く奴がいたとは思わなかったよ……まあいい……高校生になつたばっかどう

かれてんだろ。そのうちおとなしくなるか。後、その頭を明日までになんとかしろ。女とはいえ容赦せずに髪を切るからな」

竹久は岸田の言葉を半分聞きながら、その場を去った。とりあえず今後どうしようかと街中をさまよっていた。そんなときに聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あのすみません……」

振り向くと、よく知っている顔の男がいた。竹久が尊敬する北野誠一郎であった。

「ちよつと道を探ねたいんですけど……」

北野の質問などおかまいなしに、竹久ははしやいだ。

「北野さん！ あ、俺の事を知らないですよね！ 自分は一年の竹久優子！ 同じ碧空高校に通うことになるので今後ともよろしくお願いします！ あつ、道案内しますよ！」

「ど、どうして僕の名前が分かったんですか？ 初めてこの街に来たばかりなのに……」
「なあに、気にしないで下さい。さつき、好きなどころへ案内しますよ」

「うん、じゃあ碧空高校までの道を教えてくれないかな？」

「了解です！」

それから北野と竹久は楽しく会話をしながら、碧空高校まで歩いて行つた。

「僕、この顔だから皆から悪い人だつて誤解されているんだ。道を探ねても誰もまとも

に対応してくれないし……今日は優子ちゃんに会いに来て本当に良かったよ」

「なあに、俺も北野さんを初めて見たときは怖かったですよ！ 血まみれの顔で笑ったときは本当に怖かったですし」

「？ 血まみれの顔？」

「あ、いえ、こつちの話です」

「竹久はうっかりと過去の記憶にまかせて喋ってしまった。この時の北野とはそんなエピソードはないのである。そんなこんなで碧空高校についた。」

「ここが来週から僕が通う学校か。良さそうな学校だね」

「退屈はしないでですよ。色々と面白いやつがいますからね」

「おい、お前うちの学校の生徒か？ 部外者は立ち入り禁止だ！」

生活指導の岸田がうるさい声を出して、こちらにやってきた。

「なんだお前もいたのか、名前は竹久だったか？ お前の友達ならとつと校外に出せ」

北野は悪いことをしてしまったと思い、頭を下げて岸田に謝った。

「申し訳ありません。僕は一週間後にこの学校に転校してくる北野誠一郎と申します。」

悪いこととは知らずに校内に入ってしまった

「お、礼儀正しい生徒だな。いやあ、こつちも知らずに悪かったな。竹久、北野くんとは

正反対で良い子……」

北野が下げた頭を上げて岸田を見上げた。岸田は恐ろしい顔を目の当たりにして、非常に驚いた。

「き、貴様!! 良い子かと思つたが危うく騙されるところだつたぞ!! この悪人め!! この生活指導の岸田がお前を成敗してくれる!!」

岸田が竹刀を持つて北野に襲いかかった。北野は慌てながらも、持ち前の動体視力と瞬発力でかわした。

「うわあ! いきなり何をするんですか!」

「うるせえ!」

ボガ

竹久が後ろから岸田を思い切りぶん殴り気絶させた。

「なるほど、女になつても腕力は衰えてはいないな」

「あわわわ、だ、大丈夫ですか!! 優子ちゃん! なんてことを!」

「北野さん! 人が来ないうちに逃げましょう!」

「えっ? わっ! ちよつと!」

竹久は北野の手を引つ張り、颯爽と学校を去つた。

「大丈夫かな先生……」

「なあに、誰かが気付いてくれますよ北野さん」

気絶した岸田をほったらかしにした事を北野は心配していた。

「そうだ、良い場所案内しますよ北野さん！」

そう言つて、竹久が北野を連れて行つたのが碧空公園であつた。

「どうですかこの景色！ 絶景の風景でしょ！」

「すごい！ びつくりするくらいに碧い空、僕がこれから住む街が一望できる！ 初めてこの街に歓迎された気持ちになつているよ！」

「そこまで喜んでいただけたら光栄ですよ北野さん」

「ありがとう優子ちゃん、この街に初めて来たんだけど、知り合いもないし、道を尋ねても皆逃げちゃうし、なんか悲しくなつて途方にくれちやつて」

竹久は何か聞いたことのあるフレーズが北野の口から出て、思い出した。

（ちよつと待て、これつて北野さんが良子に告白したときの台詞がばんばん出てきてないか?! どうなんだよこの展開！ 俺が北野さんとそういう仲になつちまうのは色々不味い気が……）

「そんな時に君に出会えて本当に良かった。これからこの街で頑張つていけそうだよ」

北野は笑顔で竹久の方を向いた。竹久は顔を赤らめて、どきどきしていた。竹久は自分のこの気持ちはどういったものかを理解しきれなかつた。

「う、うわあ！ ば、化け物だあ！」

「怯むな！ たかが一人！ なんてことはない！」

気がつけば、不良の一人が空高く飛んでいた。

「え？ どうなつてんだ？」

双掌打で北野が不良を吹っ飛ばしていた。この後、一分足らずで不良グループ全員が北野によつて倒された。

北野誠一郎の伝説は予定よりも早く始まったのだつた。

「いちいち、あいつらどこへ……」

竹久は頭の痛みに顔をゆがめながら、起きようとしていた。

「まだ休んでいた方がいいよ」

北野が竹久を見下ろす形となっていた。竹久は北野の膝枕で寝ていたのだ。

「す、すいません膝枕なんかしてもらつて！ もう大丈夫なので！」

「遠慮せずに休んでよ。優子ちゃんが元気になるまでずっとこうしているから」

竹久はなぜだかその言葉に素直に従う気になった。しばらくの間、竹久は北野の膝枕でゆつくりしていたのであつた。

ACT. 2 竹久と良子の衝突の巻

「おい待てコラ。こら、そのトゲトゲ」

竹久が学校の門をくぐると、岸田の声が聞こえてきた。

「なんだそりゃ？ てめえ昨日俺が行ったことわかってねーのか？ 女でも容赦せずに丸坊主にすつぞこら」

竹久にはこのやりとりが懐かしく感じられた。この後、自分が岸田を殴り停学になつたと思ひ出した。

「うるせーハゲ。お前とのやりとりめんどういんだよ」

岸田に青筋がたつた。

「あ？ なんて言つたんだてめえ」

竹久は岸田を無視してスタスタと立ち去つていった。周りから女子生徒のクスクスという笑い声も聞こえてくる。

「まてこらあ！ くそう！ 俺が女に手を出さないとも思ひやがつて！」

岸田は笑い声の聞こえた方へと向かつていった。岸田は女子生徒の佐伯祐美の前で立ち止まった。

「お前か!? さつき笑った奴は!」

竹久は、怒りにまかせておとなしそうな生徒にやつあたりする岸田の姿に無性に腹が立った。

ドツカアン

竹久は以前岸田に一言申してからぶん殴ったが、面倒に思い、不意打ちで強い右ストリートをくらわした。岸田は竹久の一撃で失神した。

「大丈夫か? すまないな、俺のせいで」

竹久は佐伯に自然に申し訳ない気持ちになっていた。

「あ、はい、大丈夫です……」

佐伯は教師を一撃で失神させた不良を恐ろしく思ったが、彼女には一種の心が芽生えた。佐伯の元に親友の真子がやってきた。

「祐美! 大丈夫? 岸田のやつ酷いよね! 彼女、竹久さんだっけ、怖いけど岸田ぶつとばしてくれ清々したよ。あれ、祐美の顔赤いけど熱あるの?」

「あつ、違うの! 竹久さん格好良かったとかそういうのじゃなくて! その!」

佐伯祐美。彼女の初恋の相手は不良女子生徒 竹久であった。

やがて、男性教師が三人ほどやってきて、竹久を厳しい口調で問い詰め、指導室へと連れて行った。

「嚴重注意だけですんだか。やっぱ女子生徒だからかな……」

竹久は停学だと思っていたが、意外にも注意だけで話は終わったのである。竹久は自分の教室へと戻り、席に着いた。北野さんが転校するまで退屈だなど思いながら、竹久は授業中ぼーっとしていた。昼休み、暇つぶしになると思い、竹久は黒田達の元へと向かった。

「よう優子ちゃんか。岸田のやつ失神させたって聞いたぜ」

竹久が岸田を殴った事は既に全校生徒に広まっていたようだ。呑気に話している黒田に、取り巻きの二人が警告をした。

「黒田さん、こいつヤバいですよ！」

「もしかして俺らのことも岸田みたいにぶちのめすんじゃないですか！」

「なあに、いざとなりや俺も闘う。もちろんスケバンとはいえ、相手は女性だ。ちゃんと手加減してやるさ！」

バキィ

「どわはあ！」

竹久の一撃で黒田が倒れた。黒田は意識を失ってはいないものの、鼻血を出していた。竹久は殴るつもりはなかったが、黒田の調子に乗った発言でつい条件反射的に殴っ

てしまったのである。

「ふふふ、どうやら俺を本気にさせてしまったようだね優子ちゃん。よろしい！ この番長黒田が直々に」

バキイ ドガア ガコン

竹久は黒田にパンチの連打を決めてKOした。

「俺が手加減してやるべきだったみたいだな。番長の座は後々北野さんのものになるが、暫定的に俺がなっておくぜ。ちなみに、取り巻き二名、お前らは闘うか？」

取り巻き二名は何も答えられずに立ち止まっている。戦意喪失してしまったようであった。竹久はそれを察して、黒田達の元を去った。

校内では、竹久が番長、黒田が元番長になったという話で持ちきりだった。竹久も髪を金髪に染めて気合いを入れた。周りの生徒は皆おびえて、近寄ろうともしない。教室に入ると、意外な声が聞こえた。

「お、おはよう、竹久さん」

「ん？」

竹久は自分に挨拶した人の姿に驚いた。以前、岸田に絡まれていた佐伯であった。

「お前、俺が怖くねえのかよ」

「た、確かに怖いと思うけど、でも、悪くない人だと思ってるよ」

「……そうか」

竹久はそう言って、自分の席に座った。竹久は席に座りながら、自分の変化を感じていた。この時期の自分は狂犬という感じで、強い奴に向かつていく性格であった。それが、北野と出会ってから、性格に丸さが出てきたなと感じた。以前の自分なら、岸田を殴ったときに佐伯に声をかけなかっただろうし、今こうやって佐伯と挨拶もした。竹久はそれを良く思った。それが自分が尊敬する北野誠一郎の影響だからと……。

休み時間、廊下で二人の生徒の視線が合った。竹久優子、そして小磯良子である。

（バカ女か、まだ北野さんと会ってないせいかな、ギラギラとした目をしているな。まさか俺に喧嘩を売る気じゃないだろうな。確か、この時期辺りに碧空公園で北野さんと闘ったという話も聞くし、今のうちにおとなしくさせた方がいいか……）

（彼女が番長になったと噂の竹久さんね。あの目つき、ただのスケバンかと思っただけど、そうでもないみたい。よほどの強豪と戦ったのかしら、自分よりも強い者がいる事を達観し、なおかつ、どんなやつにも負けないという意味がある）

竹久と小磯は互いに互いのことを思い、それがなんとなくお互いに伝わったようだ。

「おい、何ガン飛ばしてんだバカ女」

「ふふ、強そうだから闘ってみたいなと思ったの」

「ちよつと良子！ また悪い癖出して！」

良子の親友の平山郁子が彼女を制止しようとした。その場を通りがかつた佐伯も二人の険悪な雰囲気を感じて機転を利かせた。

「竹久さん！ 先生が呼んでるの！ ちよつと来て！」

「……また後だな」

竹久は良子にそう言つて、佐伯のところへ行つた。

「こつちだよ」

佐伯は良子の目の見えないところまで竹久を連れて行つた。

「おい、先生はどこにいんだよ」

「ごめんなさい！ 喧嘩になりそうだったからつい！」

「……あんまし俺に係わるな。お前まで危険な目に遭うぞ」

竹久は佐伯に忠告した。竹久自身不良と闘う事が良くあり、そうなれば自分の身近な人にも危害が及ぶ。ゆえに、一般人である佐伯を巻き込みたくないと思つた。

竹久は放課後、校内の人通りの少ない場所へと来た。小磯良子が来ると思つたからだ。竹久の思惑通り、小磯良子も姿を現した。

「その気になってくれてありがとうね」

「礼を言うのはお前が勝つてからにした方がいいぜ」

両者戦闘体勢に入った。良子が早い踏み込みで突きを出した。突きを察知した竹久は顔を横にそらす。突きが通つた後、竹久のほほに切り傷が出来た。竹久は良子の強さを改めて認識し、冷や汗をかいた。

「へえ、殴るだけじゃなくよけるのも上手いのね!?!」

竹久は右の拳を振るつた。良子はスウエーギみになんとかかわしたが、竹久のパンチが予想以上に速く重い一撃であり、冷や汗を流す。

「ただのヤンキーだと思つていたけど、私以上に相当の修羅場をくぐり抜けてきているようね」

「いつとくが、俺よりも強い奴がそろそろ転校してくる。北野さんという方だ。俺も強さには自信はあるが、あの人にはかなわない」

「なるほど、あなたがそこまで言うほどだからよっぽど強い人なのね。是非闘つてみたいわ」

「俺に勝つてからな!」

二人はまた拳を交じ合わせた。

さて、この決闘の場面に偶然出くわした男達がいた。

黒田三人組であつた。

「あ、あれは竹久じゃねえか！　そして、一般人の女生徒が闘っている!?　あの娘……」

「二人とも、レベルの高い闘いしてないですか?」

「これは貴重なものを見ているって感じですね黒田さん」

「いい……」

「く、黒田さん?」

「あの三つ編み娘可愛いじゃないか……」

黒田は顔を赤くして知能の高くなさそうな面となつていた。

「よし!　あの娘を助けてやるためにも俺は加勢するぞ!」

黒田は二人の取り巻きの制止を振り切つて、決闘の場に入つた。

「ん?　タツパのある人がこつちにくるわね」

「げっ!　黒田じゃねえか?　面倒な事になりそうだから、早くこの場を去つた方が良

いぞ」

「あなた!　私たちは決闘をしているのよ!　乱入者がなんだつていうのよ!　どちら

か倒れるまで続けるわよ!」

（融通がきかねえなこのバカ女は。どうなつても知らねえぞ）

「待てい!　か弱い女生徒に暴力とは許さんぞ竹久!」

(呼び方が優子ちゃんから竹久に変わったか。まあこっちのほうがしつくり来るからいいか)

「おい！ お前は早めにこの場を立ち去った方がいいぞ。痛い目に遭うからな」

「上等だ！ 愛の前には障害というものがつき、ほげえ！」

良子は上段回し蹴りを黒田の脳天のに食らわし、一撃でKOした。

(せめて話ぐらいは聞いてやれよ)

「く、黒田さん！」

黒田の取り巻き二名が慌ててやってきた。

良子はため息をついた。

「気持ちに乗ってきたとこだったんだけど、一気に抜けちやつたな。この続きはまた今度ね」

(続くのかよ……)

竹久は良子の執念に呆れていた。後日、竹久と良子はまた決闘するのだが、黒田が乱入してきて仕切り直しとなり、その後日もまた同じパターンとなり、まともな決闘が行われることはなかった。

ちなみにこの二人の決闘の様子を見守っていた女子生徒がいた。

「竹久さん、今日も無事だったのね」

「良子、今日も無事だったのね」

二人の女子生徒は佐伯と郁子であった。独り言がお互いに聞こえ、二人は誰だ？と思
い向かい合った。

「もしかして小磯さんのお友達ですか？」

「そういうあなたも竹久さんのお友達？」

二人は互いに似た者同士であることを認識した。ひよんなことで二人はよく話し合
う仲となった。

そして……北野誠一郎の転校の日がやってきた……。

ACT. 3 北野君はどこから来たのかい?の巻

「えーつ、今日からこのクラスにはいることになった北野誠一郎くんだ。みんなよろしく頼むよ」

竹久は待つてましたと言わんばかりの反応をした。ついに自分が尊敬する北野さんがやってきたと思った。

「北野誠一郎です。こんな顔してますが、内気な小心者です。どうか皆さん仲良くして下さい」

予想通り、北野を怖がる生徒が大半であった。ひそひそとその手の会話が聞こえてくる。

「先生、俺のとなり空いているんで、北野さんはそこに座って貰いましょう」

「そ、そうだな。よろしく頼むよ竹久」

北野も竹久の存在に気付く、緊張が少しほぐれたようだ。北野は竹久の隣に座り挨拶をした。

「やあ、優子ちゃん。同じクラスで嬉しいよ」

「こちらにも北野さんと同じクラスで嬉しいですよ」

竹久は北野が怖くない男だと知らせるために、気軽に話しかけた。しかし周りの生徒の反応は竹久が思っていたものではなかった。

「竹久がああな化け物と普通に話し合ってる!?! 竹久はただの不良じゃないかもしれない!?!」

「最凶のカップルが誕生したのかもしれない……」

「この教室どうなるんだろう……」

この後、一限目の国語の先生が北野君にジョークをかまし、恐ろしい笑顔を返されたので、おびえてしまい授業にならなかつた。他の授業も同様であつた。そんなこんなでお昼休みの時間となつた。

「北野さん、何か困つたことがあれば俺が力になりますよ」

「うん、ありがとう優子ちゃん」

「時間が立てば、北野さんを普通の生徒と思う人も増えると思うので、それまでの辛抱です」

楽しいお昼休みの時間であるが、会話をしているのは北野と竹久だけ。彼ら以外の生徒は、北野におびえ、会話が出来なかつた。

「でりやああ! このクラスに転入した野郎つてのはどいつだ——つ!!」

教室に聞き覚えのある大声が鳴り響いた。元番長の黒田であつた。黒田は一人の生

徒の制服を掴み、転入生北野が誰かを聞いた。黒田が北野の顔を見ると、恐怖におびえた顔をしていた。

(そうか、この日に黒田が番長の座を陥落したのか。まつ、今暫定的に俺が番長ではあるが)

「てめえか——っ！」

黒田は地味なメガネ男 佐々木をとっつかまえた。黒田は北野に喧嘩を売るのは危ないと判断したのだ。

「おい黒田、北野さんはこの方で合ってるぞ！ それともビビっちゃまったのか？」

「そ、そうです！ 俺は佐々木です！ 北野ではありません！」

佐々木も竹久の言葉に合わせて、自分が北野ではないことを主張した。

「なんだと——っ！ 俺が間違っているとしても言いたいのか!! お前が間違はなく北野なはずだ——っ！」

「く……黒田さん……そいつは明らかに違いますよ！」

「うわああおれじゃねえよ——っ！」

佐々木の悲痛な悲鳴が教室に鳴り響いた。佐々木は黒田達に引きずられ、教室から離れていった。周りからは佐々木を追悼する声が多く聞こえた。

「北野さん、わざわざそんなことしないでいいですよ」

「そもいかないよ。これからこの学校にお世話になるんだから、掃除くらいしなないとあつ、あんなところに折れた大木があるぞ。よいしょつと」

（普通の人がこの人の掃除するって言葉を聞いたら邪魔者を排除するって思うんだろうな……）

「木が重くて……バランスが、うわあ——つ！」

「ぎ、北野さん!？」

北野は大木を持ちながら、いつの間にか黒田達三人組が固まっている場所に出た。竹久はなんとなくこの先の展開が読めてしまった。彼の予想通り、北野は大木ごと黒田達三人組に突進し、黒田達は恐れをなして泣きながら土下座していた。かくして、北野・竹久は番長カップルとして全校生徒に恐れられるようになった。

とある昼休み、廊下で竹久と北野が歩いているところ、向かいから良子が郁子と一緒に歩いていた。竹久は良子が何をしてくるかと気をつけていた。

（あのバカ女か、北野さんにちよつかいかけねえよな）

（あの人が金髪ちゃんが強いと言っていた人ね。顔は確かに怖いけど、体つきは細いし格闘技をやっている体じゃない）

(なんか、あのバカ女の殺気を感じるな。何かしてきそうな顔をしているな)

竹久がそう思った瞬間、北野は良子の顔の前に拳を突き出した。良子は冷や汗を流している。周りの生徒も緊張した様子で成り行きを見守っている。

「危なかった……もう少しでやられるところだったよ」

(すげえ、バカ女の殺気を感じ取って即座に拳を突き出すとは、流石北野さんだ……)

「い……いこう良子」

「う……うん」

郁子が空気を読んで良子を引っ張り、その場を去った。

(あれ、これどつかで見たような……)

「優子ちゃん、悪いけど窓を開けてくれるかな」

「あ、はい」

窓を開けると、北野も宙にかざしていた拳を開き、ハチが窓の外へ逃げていった。

「あ、そういう事か」

竹久は分かった。今の行為は、北野にとっては女の子を守るための行動だったのだと。しかし、ちようどよからぬ事を考えていた良子はそれを勘違いし、北野を実力者と見てしまったのだ。

「北野さん。多分今の事、勘違いされてしまったみたいですよ」

「え？ どういう事だい？」

「その内、あの三つ編みの女が北野さんに因縁をつけてきて闘うかもしれないってことです」

「え————っ！ 僕何か悪いことしちゃったのかな！」

「悪いことはしてませんが、結果的に悪いことになりましたね。まっ、そのときは俺も一緒にいるようにしますよ」

「そう、ありがとう優子ちゃん（よく分かってないけどね）」

さて、放課後の時間となった。北野と竹久を待っていたかのように良子がいた。

「ちよつとつきあつて貰つていいかしら？」

「どうしますか北野さん？」

「いいんじゃないかな？ 用事も特にないし」

「ということだ、場所はどこにするんだ？」

「碧空公園あたりまで行きましょう」

三人は碧空公園へと向かつていった。その後を追う二人の女子生徒の姿があつた。佐伯と郁子であつた。

「……多分良子、北野君と闘うみたいだね」

「竹久さんはどうするんだらう……」

三人は喧嘩には手頃な広い場所を見つけた。

「分かっているでしょうけど、北野誠一郎、相手をしてくれるんでしょうね」

「このバカ女、散々黒田に邪魔されたが今度こそ俺が」

「待って優子ちゃん、この人は僕に用があるみたいだ。僕が相手をしないと」

「……分かりました。危なくなったら俺止めますよ」

「うん、ありがとう（危なくなる事なのかな?）」

「さあ行くわよ! 北野誠一郎!」

良子は戦闘態勢に構え、右の突きを繰り出した。速い突きであるが、北野は持ち前の動体視力と反射神経でかわす。良子はすかさず上段蹴りをかますが、北野は右腕でガードした。

「待って、どうしてこんなことをするんだい?」

「あなたが強いと聞いたからよ! 先日の廊下のやりとりでも私の闘気を読み取ったじゃない! あのとき、あなたが強いと確信したのよ!」

「な、何を言っているんだ君は?」

「ここまで来たら変な駆け引きはなしよ! さああなたの全力を出しなさい」

竹久はここまで防御一辺倒の北野に危機感を感じた。

(そうか、北野さんは優しい性格だから男なら手を出しても、女には絶対手を出さなはずだ。良子がぶつたおられるまで殴られるか、北野さんが耐えきれずに倒れるか……。不利なのは北野さんじゃねえか！)

突然、北野が良子に抱きついてきた。

「なっ?! 何をしているの! 離しなさい!」

「僕は君に何か悪いことをしてしまったのかもかもしれない。でも僕が何をしたのか分からないんだ。僕は君にどうすればいいんだ」

(何を言っているのこの人は、何かの作戦だというの?)

「騙されないわよ!」

良子は膝蹴りを北野の土手つ腹に突き刺した。北野の抱きつきがゆるくなり、即座に距離を置いた。

「君に悪いことをしたのなら謝るよ。だから」

「何度も行っているように騙されないわ! さあ! 早く本気を」

北野の目から涙が出てきた。その涙を見て良子の動きが止まった。

「あ……あれ、ごめん。こんなことで涙を流すなんてみつともないね。信じてもらえないのは慣れてるはずなんだけど……」

竹久はこの様子を見て思った。何故、良子が北野さんを理解したのか、何故彼女が北

野さんに惚れたのかを……。

良子は真の北野誠一郎を理解できたのであった。

「だから言っただろう。北野さんは普通の人だつて」

「そうか、残念だつたな。本当のことを言うとな、結構期待していたんだ。北野君が本当に強くて私と武道で互角の戦いが出るんじゃないかって……」

「確かに、北野さんは俺でも恐ろしく感じるほどの強さを見せたりはするけど、基本的に優しい人だ。お前のように乱暴な事はしない」

「何よ！ 大体あなた女なのに、ツンツンした金髪ヘアーだわ、俺口調だわ、ヤンキーだわ。人のこといえるの！」

「何を！ てめえをこの場で殴り飛ばしてもいいんだぜ！」

「上等じゃない！ やってやろうじゃないの！」

言い争う竹久と良子を、北野は慌てて止めようとした。

「ふ、二人とも、仲良くしてよ。ねっ！」

「北野さんがそこまで言うのなら……」

「私も大人気なかつたわ……そろそろ友達が心配していると思うから……先に行くね」

そう言つて、良子は先に帰っていく。

ガキツ ミシ

なにか、木で生身の体を打ったかのような痛々しい音が聞こえてきた。

「きやあああ」

「!!」

北野と竹久は良子の悲鳴に気付き、スネを押しえて倒れている彼女に気付いた。

「小磯さん!!」

「一体何があつたつてんだ!!」

そこには木刀を持ち、傷跡を残した坊主頭の皮ジャンの男がいた。

「いったろ。しつこいのが性分でね。勝つまでやるのが俺の流儀だつてな」

堅山と取り巻きの二人組がいた。

かくして、北野&竹久VS堅山組のバトルが始まろうとしていた。

ACT. 4 暴走する竹久の巻

すねに打撃を受けた良子は動けない状態であった。動けない良子に堅山が蹴りをくわえた。

ドッ

「つたくよオ……今までよくもコケにしてくれたな！」

「く……」

良子はただ耐えるだけであった。

「だめだよケンカは!! 女の子にそんなことしちゃいけないよ!!」

北野が両手を上げて堅山に向かっていた。堅山はまっすぐ向かってきた北野を殴り飛ばした。

「あ……あ……」

竹久は倒れた北野を見て、堅山にダッシュした。堅山は右拳を出すのが、竹久は簡単によけ、左の大ぶりのフックを堅山の顔面にたたき込んだ。堅山は吹っ飛び、意識を失った。

「堅山さん!!」

堅山の取り巻きの二人が驚いた顔をした。

「ついでにお前らもやっておくか。怖いなら2体1でもかまわないぜ」

「くっ、舐めるな金髪女あ！」

取り巻きの一人が襲いかかったが、竹久は難なく一撃で仕留め、もう一人も一撃で仕留めた。竹久は堅山達が戦えない状態なのを確認すると、北野の元へ駆け寄った。

「大丈夫ですか北野さん！」

「うん、僕は大丈夫だよ。それよりも良子ちゃんが……」

「私も大丈夫。骨は折れてないみたいだから」

竹久は北野の無事を確認できて安心した。しかし、竹久は重要な事を思い出した。

「そういえばこの堅山ってやつは自分が勝つまでケンカをやり続けるらしいな。なら、徹底的に負けという事を分からせねえとな」

竹久は倒れている堅山の腹部に強烈な蹴りをくわえた。

ガゴオ

「優子ちゃん！ それ以上の暴力はいけない！」

しかし、竹久はやめなかった。堅山の腹部、あばら骨、そして顔面に強烈な蹴りをくわえていった。

「北野さん、今後のためにこうした方がいいですよ。こいつらはまた俺らを襲ってくる

可能性があります。そのめつぼう強いバカ女でも不意打ちを食らったらこのざまです。なら、仕返する気も起きないほど痛ぶんなきやいかんでしょ！」

ドガア ガギイ ベキイ

「う…………やめ…………」

堅山の意識が戻った。顔には脂汗が流れ、苦しそうに顔をゆがめていた。

「あばら骨がいったようだな。もう二・三本いつとくか？」

「うあ…………」

堅山は竹久にすっかり怯えている。竹久がさらに一撃をくわえようとした瞬間であつた。

竹久の胸部に強烈なインパクトが伝わり、体が吹っ飛んだ。北野の双掌打が竹久に決まったのだ。竹久は意識を失い、しばらくの眠りについた。

「す…………す…………並外れた瞬発力を持つているわ…………双掌打があれだけ人が吹っ飛ぶなんて…………」

北野の実力を目の当たりにして良子は驚いていた。

対照的に竹久を倒した北野は泣いていた。

「ごめんよ…………ごめんよ優子ちゃん…………女の子に暴力を振るっちゃいけないと言つてたのに…………」

北野は意識を失った竹久の元に駆け寄っていく。

「竹久さん！」

佐伯が突然茂みから飛び出してきた。竹久のそばに走って駆け寄った。

「私が体を張って止めれば、竹久さんが死ぬこともなかったのに……できるなら私が悪魔の犠牲になりたかった……」

物騒なワードを聞いて、とまどう北野の姿があった。

「え、え、その……」

「佐伯さん！ 危ないよ！」

郁子も茂みから飛び出してきた。郁子の姿に良子がおどろいた。

「郁子！ あなたいつからいたの？」

「途中までつけていたんだけど、はぐれちゃって、ちょうど良子が倒れたタイミングで来たの」

「ちなみに、そっちの人は郁子の知り合い？」

「まあ、そんなもんかな？」

「その人！ 金髪ちゃんは気絶してるだけだから、心配しなくてもいいわよ！」

北野と良子はこれまでの経緯を佐伯と郁子に説明した。

「やっぱり北野君が普通の人だつて言つても、ちよつと信じられないな〜」

「あの人達、竹久さん一人でやつつけちやつたんだ。すごい……」

「二人には北野君が普通の人だつて分かつて貰うために、気軽に挨拶するように心がけてね。分かつた？」

「良子がそうまで言うなら……」

「竹久さんと仲良くしている方なので何とか……」

「よし！ このしつこい輩達が起きる前に退散しますか！ まあ金髪ちゃんがポコポコにしたから大丈夫でしょう。郁子、ちよつと足が痛いから肩貸して貰える？」

「いいけど、私小さいから大丈夫かな……」

竹久はまだ意識を失つたままである。北野がそんな竹久を見て発言した。

「じゃあ優子ちゃんは、僕が家までおぶつていくよ。彼女の家なら知つているし」

そこへ割り込むように佐伯が発言した。

「あ、あの！ 私も竹久さんと一緒についていきます！」

「うん、いいよ」

その様子を見てもの言いたげな良子がいた。

「もしかして、佐伯さん金髪ちゃんのこと好きなのかな？ 空気を読んで北野君と二人

で帰らせた方が良くないかなと思つただけど、そうさせたくないのかな？」

「あれ？ 私てつきり良子も北野君に惚れたのかと」

「な、何いってんのよ！ 確かに北野君すてきだけど！ ほら！ 案外、金髪ちゃんとお似合いのカップルじゃない！」

「仮に佐伯さんが竹久さんとくつついたら、北野君フリーになるよ。良子にチャンスが来るんじゃない？」

「……そうか……いや、その……とにかく！ 北野君は私にとって良いお友達！ 分かった？」

良子は顔を真っ赤にして郁子の発言を全力で否定しようとした。しかし、郁子から見れば、好きなのを隠そうとしているようにしか見えなかった。

どう帰るか話もまとまり、皆帰宅していくのだった。

「……あれ？ 俺、そういえば碧空公園で……」

竹久の意識が覚めた。誰かにおぶって貰っているような感覚がある。一体誰が自分をおぶっているのか確認して驚いた。

「き、北野さん!？」

「あつ、目が覚めたんだね」

「良かった……竹久さん」

「あの、これは一体……?」

「ゴメンね。僕が優子ちゃんに乱暴しちゃったから……せめてものお返しで家まで送っているんだ……」

「いいですよ悪いですから! 降ります!」

「ダメだよ! まだしばらくおとなしくした方が!」

「そうですよ! あんな一撃くらったんですからしばらくはおとなしくしてない!」

竹久が佐伯の顔を見て不思議な顔をした。

「佐伯だっけ? お前なんでいんだ?」

「あつ、それは、良子さんと不穏な雰囲気になって心配になったので……」

「そうか……」

しばらく沈黙の状態となっていたが、佐伯がとんでもないことを言い出した。

「あの……竹久さんって北野君の事が好きなんですか?」

突然の発言に竹久と北野の顔は真っ赤になった。

「な、何を言っているんだ佐伯さん! ぼ、僕と優子ちゃん友達だけで、今も友達として当然のことをしているだけで!」

「そ、そうだぞ! 俺は北野さんの……北野さんの……あれ!」

(なんなんだこの気持ちは! 俺は一体何を考えているんだ!)

竹久は自分でもよく分からない気持ちになっていた。北野とは友達ということを佐伯に伝えようとしたが、それを自分の脳が否定しているのだ。じゃあ自分の北野に対する熱い思いはなんなのか？ その答えを考えようとすると竹久の心臓の鼓動がドクンドクンと高まった。

佐伯は、二人の気持ちを察してしまった。

「あ、諦めませんか!!」

そう言つて佐伯はどこか遠くへ走っていた。

「なんだつたんだらう今の？」

「さあ?」

北野と竹久の二人で帰る事になり、なんとなく竹久は落ち着き、背中で眠りについた。竹久はベッドから上体を起こした。時計を見ると朝の七時。体は男の体に戻っている。

「もしかして、今までの事全部夢だったのか……クソ女が変な事言つたからか……」

その日の竹久は、北野をまともに見る事が出来なかった。一目でも見た瞬間、こっぴどくかしい気持ちになり顔が真っ赤になるからだ。

更に、良子が北野と仲良く話しかけるたびに、バカ女どつかへ行けという強い気持ち

がうまれてきた。

かくして、彼のヒロイン物語は一端幕を閉じたのであった。

ACT. 5 平山郁子の初恋の巻

私は今、自分でもよく分からない気持ちになっている。

「ねえ良子、ちよつといいかな？」

「ん？ どうしたのよ郁子」

「その、人気のないところで話したいの」

「お金の貸し借りは駄目よ。うち貧乏道場だからお金ないし」

「そうじゃないの」

とりあえず私の一番近い友人小磯良子に相談してみることにした。特に良子によく絡んでくるあの人のいるところでこの話は聞かれなくなかった。

「えっ、あの馬鹿が好きになつたつて!？」

「しっ！ 声大きい！」

予想通りこの話をすれば良子が驚くと思い、すぐさま落ち着かせた。

「実は……先日碧空公園での闘いで黒田さんが私を不良から守ってくれたの……」

「まさか、それであの馬鹿が好きになつたつていうんじゃないでしょうね？」

「私だって何で黒田さんを好きになつたか分からないだもん！」

そう、私は碧空高校の前番長である黒田清吉を好きになつてしまつたのだ。私を守つてくれた黒田清吉の姿がとても格好良く見えたのだ。

「どうせあの馬鹿は強い敵と闘いたくないから、郁子を守るのに徹していただけしよ！」
「そうだとしても、私を守つてくれた事には変わりないもん！」

いつも周りの非常識な人を落ち着かせるのが私の役目だが、今日ばかりはそつち側の人間になつてゐるみたいだ。

「落ち着いてよ。郁子らしくないじゃない」
「う、うん」

良子に言われて、冷静さを取り戻した。

「まず、あの馬鹿は不良よ。おまけに気も弱くて、実力も無くて、おまけに私につきま
とつてくるし！」

「だからこそ良子に相談しているのよ。黒田さんが惚れているのは良子だし、それに北
野君とも付き合つているから恋愛経験もあるでしょ？」

「あ、そ、そうだけど！ でも北野君とはキスまでしかいってないから！」

やはり良子は北野君との恋バナをすると照れくさそうな態度をとる。

「今日はこうやって良子と話せただけでも良かったわ。しばらく日がたてば自分の中で

落ち着くと思うし、また何かあつたら相談するわ。あつ、今日のことは内緒だからね」「誰にも言わないわよ。あとね、あの馬鹿と付き合うなんて気起こしたら、私が直々にあの世に送つてやるからね!」

「良子が言うのと本当にやりそうな気がするから怖いわ……」

こうして、私は良子の家を去つた。

さて、この話を知るのは良子と郁子だけではなかつた。娘とその友人にお茶とお菓子を持って行こうとした時に、立ち聞きしていた男がいたのだつた。良子の父、小磯平三である。

「とんでもないことを聞いてしまった! 郁子ちゃんがあの良子につきまとう馬鹿を好きになつてしまふなんて……郁子ちゃんは良子にとつて大事な親友だ……ならば、私があの男を始末せねばならん!」

その晩、小磯平三は黒田清吉を葬る計画を立てるのである……。

翌日の朝、小磯家での会話である。

「良子、今日は道場にお前が好きだと抜かすパンチパーマの不良を連れてきなさい」

「えつ、黒田の事? いいけど、どうしたの?」

「聞けばあの男はお前によく突つかかってくるそうじゃないか。だから私が直々にぶちのめしてやるのだ」

「でもお父さんいつもぶちのめしてないかな?」

「あれでも十分手加減している。しかしその手加減が良くなかった。今日こそお前につきまとわれないように、この私が始末しよう」

「まあお父さんがそこまで言うなら連れてきてもいいけど……」

「あとな、郁子ちゃんも連れてきなさい」

「郁子も? まあいいけど」

平三の計画はこうである。郁子の目の前で黒田をこてんぱんに打ちのめし、二度と好きになる気持ち起きないようにしてやろうという、彼らしい単純なものである。しかし、それを素直に言つては、娘と友人の内緒話を聞いてしまったことになる。だからこそ適当な理由が必要であつた。その理由として考えたのが、娘につきまとう男をボロボコにするという名目である。平三の考え通り、良子もその考えにのつてくれたので、平三としては、作戦の第一歩が無事踏み出せたと言つたところである。

「北野君良いかな?」

「どうしたの良子ちゃん?」

小磯良子は北野誠一郎に相談をした。

「お父さんが今日黒田を本気でボコボコにするって言うって道場に呼ばせるみたいなんだけど、何か変なのよね」

「変？ いや、それよりも良子ちゃんのお父さん強いし、黒田さんが大変な事になっちゃうよ!!」

「あれはどうなつてもいいのよ。ただ、お父さんとしては私と北野君の仲を裂くのが最優先事項だと思うの。正直黒田なんてお父さんからすればいつでも始末できる存在よ。多分何か裏があるわ……」

「うーん、そうだ、良子ちゃんのお父さんに直接聞いてみようよ」

「北野君らしいけど、北野君じゃまず口を割らないと思うわ。というか、私にも口を割らないかもね……」

「じゃあどうしよう?」

「そこで何かあった時にお父さんを止められるのが北野君だと思うの。だから今日は北野君も一緒に私の家に来てよ」

「僕で力になれるか分からないけど、良子ちゃんがそういうなら」

んんんんんんんん

どこからともなく大男が北野と良子のもとへ向かってきた。黒田清吉である。

「小磯良子——っ!! まさか君はまた北野さんと不純異性交遊を!!」

ガゴン

良子の突き上げの右掌底が黒田の顎に見事にヒットした。

「ぐわふっ!」

しかし、黒田も数々の強豪に打ちのめされたおかげか、一撃で失神はしなかった。よろよろと立ち上がってくる。

「黒田、今日はあるたに家に来て欲しいのよ」

「え? 俺を小磯良子の家にか?」

「そうよ、お父さんが是非ともあんたを鍛えたいって言っているのよ」

「ふふふふ……はっはっはっは!! ついに小磯平三が俺の小磯良子に対する愛を分かってくれたか——っ!!」

黒田清吉は勝手な勘違いをし、馬鹿騒ぎをしていた。

「ところで良子ちゃん、竹久君や幾野ちゃんは呼ばないのかな?」

「駄目よ。あの二人は口で言うより手が先に出るタイプだもん。呼んだら余計にややこしいことになるわ」

(良子ちゃんもわりかし手が出ると先に出るタイプだよ)

北野は気を遣って心の中でつぶやいた。

放課後、良子は竹久、幾野、荻須あたりが勘付いて道場へ来ることを心配していた。しかし、運の良い事に三人のトラブルメーカーは補習が重なり、道場へ向かう余裕はなかった。

私は今日も良子の家に行くことになった。何でも良子のお父さんが連れてくるようにと言ったとのことだ。北野君がいるのはまあいいとして、なんで黒田さんまでいるのよ！ なんかあの日以来この人の顔を直視できないのよね。

さて、道場に到着すると良子とお父さんが何か内助話をしているみたいだ。

「おい良子、なぜあの悪魔までいるんだ！」

「いいじゃない。北野君がいて何か不都合あるの？」

「いや、ないが……」

「じゃあ早いところ黒田あいつをボコボコにしてよ。娘の将来に係わるからね」

「分かった。良子、そして郁子ちゃんのためにもな……」

「え？ 郁子？」

「あ、いやいや、お前の周りに不良がいると友人にも悪影響があるからな」

「どうやら二人の内緒話は終わったようだ。」

「さて、黒田君」

「ハイ！ お義父さん！」

「お前にお義父さんと呼ばれる筋合いはないっ!!」

「ですが、私と良子さんは相思相愛の仲であります!!」

「……なるほど、お前の気持ちは分かった。今日の私との組み手の結果次第で、娘を譲つてやらんこともないぞ」

「ほ、本当ですか!!」

「ちよつと！ 何言っているのよお父さん！」

「お前、私がこの男に負けると本当に思っているのか？ 心配するな、この平三、命にかけてもお前を守る！」

「なんか凄いことになっちゃっているわね。北野君はこの会話を聞いてどう思っているのかな？」

（黒田さんも良子ちゃんの仕事が好きなんだよね。応援してあげたいけど、僕も良子ちゃんのことを好きだからなく）

と、呑気に考えている北野君であった。

そして、黒田清吉VS小磯平三の組み手が始まった。
ばきいん

黒田の顔面に平三の左正拳突きがヒットした。あまりの衝撃に黒田の身体が吹っ飛んだ。

「さあ立て。娘が欲しいんだろ？」

黒田が起き上がってきた。ただその様子がいつもと違う。

「あれ？ こゝこはどこだ？ 俺は何をしているんだ？」

黒田がかつて荻須と闘った時に起きた現象が再び発生していた。

「どうした！ でくの坊！」

「ああん？」

黒田は目の前の道着を着た中年のおやじが何者かも思い出せない状態である。しかし、自分を挑発するでくの坊というワードにきれた。

「だれがでくの坊だ！ このちよびげやくザめ！ うおおお!!」

黒田が巨体の利を活かした打ち下ろし気味の右ストレートを放った。

ドゴオオ

平三はガードしたが、黒田の予想外のパワーに驚く。

「ぐっ！ 重い！ これではガードの意味が無いな！」

黒田はさらにパンチを打ち続ける。ひとまず平三はダメージをためないように、距離をとり、攻撃を避けることに専念した。

「足下も意識しな平三！」

「ごおん

右膝蹴りが平三のみぞおちにクリーンヒットした。

「ぐほお！」

平三の表情からダメージがあることがうかがいしれる。

「うそつ、お父さんが押されている！ 最悪北野君に加勢させて黒田をしとめるしかないわね……」

良子は父の滅多に見せない姿に驚いていた。

「黒田さんってやっぱり強いんだ……」

郁子はいつの間にか黒田の闘う姿に見とれていた。

「はははは!! まさかお前が小磯良子の親父とはな! お前に勝って小磯良子と幸せな家庭を築きあげるためにも、この勝負! 必ずかゝつ!!」

ばきいん

黒田の左フックが平三の顔面にヒットし、平三は膝から崩れ落ちる。それは良子にとって、黒田と付き合うという死刑宣告でもある。

「いやああ!! どうしてこんな結果になっちゃうの!! こうなったら北野君!! お父さんの仇をとって!! 北野君が私をかけた勝負で黒田に勝てば問題ないわ!」

良子は必死の形相をし、北野君はたじろぐ。

「え、いや、暴力は良くないし、それに良子ちゃんのお父さんまだ死んでないんじや……」
むくり

平三がたちあがってきた。

「その悪魔の言う通り。私はまだ死んでおらん！」

「年寄りの冷や水つてやつだ。それぐらいにしときな」

「お前、幸せな家庭とか抜かしていたな。お前に何が分かると言うんだ!!」

平三が突然にきれ始めた。

「十年前、私の妻は亡くなり、私と良子はどん底に落ちた。しかし、私は娘の手前、弱音を見せるわけにはいかない。私はどんときも良子に強い父の姿を見せ続け、そして良子がどんな困難にも負けないように強く育ててきた！」

「お父さん……」

良子は平三が長年心に閉じ込めていた本音を聞いて感銘を受ける。

「そんな時、良子の友達になってくれたのが郁子ちゃんだった」

「わ、私？」

意外なタイミングで自分の名前が出て郁子は驚いた。

「強くなりすぎた良子を怖がる人が多い中、彼女だけは小磯家に遊びに来てくれた。妻

が亡くなってから死んだような目をした良子に、郁子ちゃんは笑顔を取り戻してくれた……私にとっては郁子ちゃんも良子同様大切な存在なんだ……」

もはや周りの皆は黙って平三の話を聞くだけであった。

「私からすれば、自堕落な生活を送ってきた貴様に幸せな家庭を築き上げるなんて百年早いわ——っ!!」

どいおおん

平三は黒田に双掌打を浴びせた。再び黒田の身体は吹っ飛び失神した。しかし、平三は攻撃をやめる気配がない。

「お前が二度と良子や郁子ちゃんに近づかないように、徹底的にたたきのめさないとな」

黒田は意識朦朧かつダメージもあり、まともに動けない。

ばっ

黒田を守るように、両手を広げて平三の前に立ち上がる人がいた。郁子である。

「もうやめてください！ ここまでしなくていいじゃないですか!」

「郁子ちゃん、何故この男をかばうんだ?」

「私が黒田さんを好きだからです! 北野君や良子のお父さんよりも弱いけど私を守ってくれた人なんです!!」

自然と郁子の目から涙が出ていた。

「えっ、郁子言っちゃったの!？」

「えっ、郁子ちゃん黒田さんの事が好きだったの!？」

良子と北野君は郁子の突然の告白に驚いた。

「すまないな。女の子を泣かせるなんて私は最低な男だ。今日は郁子ちゃんの涙に免じてその男の処刑は後日にしてやろう」

(後日なんですな……)

と郁子は思った。

「あの時のお礼、ようやくできましたね」

郁子は意識朦朧としている黒田に喋った。黒田はその言葉に返事を返さなかった。

「くそおお!! 俺は負けてしまったのかああああ!! 小磯良子を我が物に出来なかったああああ!!」

黒田は平三をあと一步まで追い詰めながらも、勝てなかった悔しさを口にした。この勝負に勝てば小磯良子と堂々と付き合うことも出来たので、その悔しさはなおさらである。

「ゴメンね、僕何も出来なくて」

本日何かあった時のために、北野君が呼ばれていたが、全くその必要はなかった。

「いいのよ、北野君いつも私達以上に大変な目に合っているんだから」

小磯良子はフォローをした。

「郁子ちゃん、本当にあの男で良いのかい？」

平三が郁子を心配していた。

「心配いらないうですよ。彼、意識朦朧としていたから全く私の告白聞いてなかったみたいです」

「そうか、奴が郁子ちゃんを泣かせるような真似をしたら遠慮無く殺りにいくからな」

「ははは……」

郁子が反応に困る表情をしていた。

さて、実は黒田清吉。平三の強打を食らいながらも、早い段階で意識を取り戻していた。つまり、黒田清吉は平山郁子の告白を聞いていたのだ。しかし、彼自身もどう反応して良いか分からず、ごまかすためにわざと聞いていなかった振りをしていた。

黒田清吉は本日より、小磯良子の友人Aである平山郁子に惚れたのである。二人の中が進展したかどうかは読者のご想像にお任せしよう……。

ACT. 6 児島来たるっ！の巻

碧空高校に転校生がやってきた。

「今日から君達の新しいクラスメイトになる児島猛君だ。皆仲良くしてやってくれ」

数分前まで転校生を期待していた生徒達が静まりかえった。各々の生徒の大半が「なぜ白雲高校の児島がっ!？」と思っていた。

「児島君、あそこの空いている席に座ってくれ」

児島は無言で指定された席に向かっていく。彼を積極的に見ようと思う生徒はいなかった。下手に何かすれば、恐ろしいことになるかもしれない。生徒達はそう思っているのだ。

児島猛の転校の噂はすぐに広まった。

「なにいつ!? 児島が転校してきただどっ!？」

校舎のいつもの喫煙スペースに黒田、時山、大下のいつもの三人組がいた。黒田は大きな声を出して驚いていた。

「今学校中で持ちきりの話題何すよ」

「俺、校舎で児島が歩いているのを見ましたよ」

時山と大下が黒田に説明していた。黒田は深くため息をついた。

「くそっ、ただでさえ化け物じみた連中が多い学校なのに、ますます俺の肩身が狭くなるじゃねえか……」

「それにしてもなんで児島の奴転校してきたんですかね?」

「白雲高校で退学でもくらったんですかね?」

「聞きたいか?」

黒田達は感じ取った。強者がかもしだすオーラ・威圧。彼らの心に巨大な恐怖が生まれた。

「こ、児島! なんでここにっ!」

「ここに行けば知っている奴に会うかなと思つてな。どれ、俺も一本吸わせて貰うか」

児島も学生服からたばこライターを取り出して、しゃがみ込み喫煙を始めた。黒田達は気が気でなかった。

「や、や、やばいすよ黒田さん! このままいたら何されるか分かったもんじゃないですよー!」

「もう俺達の愛用場所を譲りましょう! ここは児島に献上しましょうよ!」

「ば、馬鹿言うな! ここは俺達にとつては聖域だ! 元番長の意地にかけてこの場所は渡さねえ!」

「勘違いするな、俺は雑魚をとって食う気はねえよ。ただ、ちよいと誰かに話したい気分だな」

「話したい？」

ふう〜

児島はたばこの煙をふいて一呼吸置いた。

「俺の親が離婚した。それにともなって住むところも変わった。一番近い学校がここだった。ただそれだけのことだ」

離婚というワードを聞いて、黒田達はなんとも言葉を出しづらい雰囲気になった。

「ところで北野にも挨拶しに行こうと思ったが、どこにいるか知らねえか？」

「き、北野さんなら1年1組だ！俺達と違って真面目だから授業を抜け出す事もないし！ここには来ないだろう！」

「そうか、邪魔したな」

児島がたばこを舗装された地面に押し付けて火を消し、そのままその場をあとにした。

昼休み、児島が校舎を歩いていると、一人の男がやってきた。

「お前！俺を転校初日にぼこった奴じゃねえか！」

真つ赤な髪をし、生来の三白眼、そして好戦的な態度。荻須高志であった。

「今こそ小磯道場での修行の成果を見せる時がきたぜ!!」

ばきいん

児島は荻須がくりだした右のストレートに対し、カウンターで左のストレートをくりだした。

「へへっ、前の俺だったらここで倒れていただろうな!」

荻須は鼻血を出しながらも児島のパンチに対し倒れなかった。

「雑魚に用はない。消えろ」

「雑魚かどうか確かめさせてやろうじゃねえか!!」

どがあ

児島は向かってきた荻須をボクシング仕込みの左アッパーで失神させた。

「ちよつとなでる程度で勘弁してやろうと思っただがな。身の程をわきまえないお前が悪いんだぜ」

いつの間にか二人の周りに多くの生徒が集まっていた。児島は転校初日で停学処分だなと覚悟した。

「ほう、騒がしいなと思ったら、久々に骨のある奴がこの学校に来たようだな」

誰もが児島に恐怖を抱く中、一人の女子生徒が児島の前に近寄ってきた。白滝幾乃だった。

「お前、俺が怖くないのか？」

「いや、むしろ久々に好敵手に出会えたなと思っている」

しゅっ

幾野は児島の顔面に高速の掌底を突き上げた。児島はかろうじて避けたが、右頬に切り傷が出来た。児島は幾野の強さを認めながらも引く態度を一切とらなかつた。

「お前何者だ？ 不意打ちとは言え俺の顔面に触れた奴は久々だぜ」

「私が何者かと聞かれれば幾野だと答えるが」

「ふざけてんのか？ 俺は女を殴る趣味はない。俺が本気になる前にさっさといけ！」

「安心しろ。私は強いからそう簡単には殴られない」

しゅっ

児島は幾野の顔面に右のストレートを放つ。しかし、その拳は幾野の前で止まった。

「最終警告だ。お前の答えを聞かせて貰う」

「私の答えはこれだ」

ぶおおん

幾野は高速の上段後ろ回し蹴りを放った。児島は咄嗟にバックスウエーでかわそうとする。

ちっ

幾野のかかどが微かに児島の顎をかすめ、児島はよろめいた。

児島は一気に戦闘モードに切り替わった。

「その顔が潰れたら俺が責任をとってやろう」

「悪いな、私は既に心に決めた男がいる」

しゅっ バキイ どがっ

二人は激しい攻防を開始した。

幾野は児島の適所をつく拳を最小限の防御でさばきながらも、上中下の確な攻撃でダメージをあ。

一方の児島も幾野の体の動きから攻撃を読み取り、時にはかわし、時にはわざと攻撃をくらいながらも一撃のパンチを当てにいった。

周りの生徒はそのレベルの高い攻防をただ見守ることしか出来なかった。

「きええええええ!!」

突如二人の決闘の場に奇声が鳴り響いた。その奇声により二人は攻撃を止め、奇声を発した人間を確認した。

「北野っ!？」

「誠一郎か、今は取り込み中だ。用があるならまた後にしてくれ」

「駄目だよ喧嘩は！ 幾野ちゃん！ 君は可愛い女の子なんだよ！ あれっ、なんで白雲高校の児島さんがこんなところにいる？」

「北野、お前の強さはよく分かっている。だがな、この女との闘いの邪魔だけはするな！」

「よし、喧嘩やめた」

幾野の突然の切り替えに児島は呆気にとられた。

「ごらあ！ ここまで盛り上がってそれはねえだろうがあああ!!」

「私の誠一郎が喧嘩をするなど言っただ。だから喧嘩をやめたんだ。それにな……私のようながさつな女を可愛い女の子扱いしてくれたからな」

その言葉を聞いて児島の表情が柔らかくなった。

「おい、次はいつ遊べる？」

「知らん。まあその内来るだろう」

幾野も児島に微笑をかえした。

ACT. 7 悪魔と化した北野君!?!の巻

碧空高校生徒会長の須田は北野誠一郎への復讐を考えていた。自身の策略の失敗が導いた全くの自業自得かつ逆恨みではあるが、自分が堕ちてしまったのは北野誠一郎のせいだと考えていた。

「ふふふ、こいつで北野誠一郎をどん底に陥れることが出来る!!」

小出が生徒会長を心配そうに見つめている。

「会長、大丈夫ですか?」

「大丈夫なもんか! 生徒会長であるこの俺が生徒の信頼が全くないんだぞ!」

「それは自業自得ですけどね」

「ぐっ! まあいい、俺は北野誠一郎を悪魔にする術を見つけたのだ!」

「また変な企みを……もうやめませんか?」

「うるさい! 俺はどうとう見つけたのだ! 人を思い通りにする黒魔術をな!!」

「なげかわしや生徒会長……」

副生徒会長の小出は落ちきった須田の姿を見て嘆いていた。

「さあ、この手順で黒魔術を行えば、北野誠一郎を闘いを好む凶悪な性格にできるはずだ

……」

「きひやえええいいいい!!」

北野君は自身の体がおかしくなっていると気付いた。何か自分が自分でなくなるような感覚を覚えた。

「くつくつく……」

北野君は不気味な笑みを浮かべていた。

「ナンバー2！ 勝負だ！」

北野君が一人でいたところ、荻須がやってきた。

「雑魚の荻須か……まあいい、ちようど暴れたいところだった」

ぶるっ

荻須は北野君から今までに感じたことのない殺気を感じた。

（なんだこれは！ いつものナンバー2の気じゃねえ！ つうか別人、いや、本当の悪魔か!?!）

「う、うおおお!!」

荻須は北野君めがけて渾身の右ストレートを放った。

どすん

北野君は荻須の右ストレートに双掌打のカウンターをくらわせ、荻須を2メートルほど後ろに吹き飛ばした。

「はあー!」

荻須は完全に失神していた。

「強い奴がまだいるはずだ……」

北野君は新たな敵を求めてどこかへと歩いていく。

かくして、北野君は須田生徒会長の得体の知れない黒魔術により、正真正銘の悪魔と化してしまったのだ……。

「北野さん! お疲れ様です!!」

黒田率いる三人組が北野に出会い、挨拶を交わした。

「おや、北野さん? 機嫌でも悪いのですか? なんかダークな雰囲気か漂っているようで?」

黒田は北野の様子がおかしいことにきづいた。

「相手をしてやるよ」

「え?」

どすん どすん

黒田の取り巻きの時山と大下が黒田の後方に吹っ飛んだ。

「時山！ 大下！ どうした！」

「き……北野さんが……俺達を……」

北野君は一瞬のうちに時山と大下に双掌打をくらわせたのだ。

「北野さんだつて？ 何を馬鹿な事を言っているんだ！ 北野さんは俺達には心優しい

番長様だぜ！」

どすん

黒田も北野の双掌打をうけ、吹っ飛んだ。

「黒田さん、恵まれた体格を持っているのにもったいないね」

あつさり倒れた黒田達に北野君はがっかりした表情をしている。

「てめえ、いきなり何しやがる!!」

黒田が目覚めた。いつもの弱気な態度が全くなかった。

「意外と早く起きてきたなあ。普段やられっぱなしだから打たれ強くなっているのかな？」

「その怖い顔！ 俺様にどつくとは良い度胸しているじゃねえか！」

黒田の言葉に北野は違和感を感じた。

「もしかして頭へのショックで記憶を一時的になくしたのかな？ そういえば黒田さ

んって、衝撃で記憶をなくすと強いとか、誰かから聞いたなあ」

「うおおお!!」

ぶおん　ぶおん　ぶおん

黒田は重さの載ったパンチを振り回していく。まともに当たれば誰でも一撃でKO出来るほどの威力を持った拳だ。しかし北野君は持ち前の動体視力で黒田の攻撃を難なくかわしていった。

「黒田さん、小磯流道場で少しはパンチを当てる練習もした方がいいよ」
どすん

黒田は再度北野君の双掌打を受けて、完全に失神した。

「お、おい、あれ北野君だぜ!」

ついに周りの生徒達が北野君の異変に気付いた。そしてすぐに校長の元にも話が届いた。

「なに!　北野誠一郎が暴れているだど!　そうか……ついにあの悪魔を追い出せる時が来たんだな!!　至急影の七人を呼びだすぞ!!」

校長は早速電話をかけ、影の七人のうちの五人を呼び出すことにした。

「あ、あいつにだけは関わりたくないんだ!!」

かつて北野君に対しトラウマを植え付けられた入江はこの有様だった。

「あの悪魔に挑むにはまだ修行不足の身……」

熊谷も北野討伐の要請を断った。

他の三人も北野君の恐怖伝説をどこからか聞いたのか、校長の要請を聞こうともしない。

「おのれ北野誠一郎!! たくさんの人に恐怖を植え付けおつて!! 白滝先生と菱田先生だけでは心細い……いや待てよ、以前この学校の三者面談の日に白滝先生と同等以上の力を持った二人がいて……」

さて、様子のおかしくなった北野君の元に碧空高校の強者達が集まってきた。

「え……本当に北野君なの?」

小磯良子が目の前の北野君の姿を信じられないといった感じで見ている。

「お前はあいつのそっくりさんが暴れ回つていても言いたいのか? あんな顔している奴はこの世にただ一人だけだろ」

白滝幾乃が小磯良子の疑問に回答をよこした。

「北野さんどうしちまったん? 機嫌でも悪いのか? 普段ならあんなことする人じゃねえ」

竹久もまた、いつもと違う北野にとまどっていた。

ぎいん

白滝、小磯、竹久の三人を蛇睨みのごとく北野君が睨み付けた。三人の動きが一瞬止まった。

「きええええ!! 強い子みつけええええ!!」

北野が全速力で三人の元へと走ってきた。

「二人ともいけ!」

「幾乃! あんただけに任せるわけにいかないわよ!」

「北野さんをお前だけで止められると思ってるのかよ!」

「良子、北野を本気で殴れるのか? 北野の正妻であるお前にそれができるとは思えない。

金髪君も同様だ、お前は北野の大事な友人なんだろう?」

二人は幾乃に答えを返せなかった。

「私は所詮愛人ポジション狙いの女だ。北野が駄目なら金髪君二号もいるしな」

「だからって! あんただって北野君の子と好きでしょうが!!」

(金髪君二号ってだれだ?)

幾乃が向かってくる北野君の前に立ちはだかった。

「幾乃ちゃんか! 本気で闘うのはこれが初めてだねえ!」

しゅっ しゅっ しゅっ

北野君の掌底が素早く連打された。幾乃はそれをかわすので精一杯だった。思った以上に北野君の動きが速く、一撃必殺の威力あったからだ。

「くっ！ 北野の奴がこれほどまでの動きを見せるとは！ さては生来の優しさでこれまでの鬪いは手加減していたことか！ ならば！」

みしい

幾乃はガードをして掌底を受けつつ、鋭いローキックを北野君の内ももの膝付近に放った。

がく

一瞬北野君の膝が落ちた。しかし同時に幾乃も後方へ吹っ飛ばされた。

「相打ち覚悟で放ったが、私の方がダメージが大きかったか」

幾乃はあばら骨の故障を感じていた。

「まだやるかい？」

北野君が悪魔の笑みを浮かべている。それに対し幾乃は苦笑いを浮かべた。

「こつとも実力差を見せ付けられると、余計に倒したくなるもんだ」

幾乃はあばら骨の痛みに耐えながら北野と向き合った。

ばきっ

突然北野君が横方向に吹っ飛んだ。一人の男が北野君を不意打ちでふつとばしたの

だ。その男は児島猛であった。

「北野、お前ほど強いならこれくらいの不意打ちは良いハンデだろう？」
すくり

北野君の頬が赤くなっていたが、何事もなかったかのように立ち上がったてきた。
「酷いなあ児島さん、流石に元ボクサーのパンチは僕でも効くよ？」

ギャラリーが児島猛の登場にざわついた。

「おいおい白雲からやってきた児島まで登場したぜ！」

「北野君、今日一日でこの学校の実力者全てを倒すつもりか！」

児島猛の登場を幾乃も黙ってみてはいなかった。

「なんのつもりだ。人様の闘いにしゃしゃりでてきおって」

「怪我した女は引っ込んでろ。こいつは俺がやる」

「待てよ児島！俺だってこれ以上黙って見てはいられないぜ！北野さんを止めるのはおれだ！」

竹久もまた、すぐにでも北野と対峙する気持ちであった。

「私だって！北野君がこれ以上暴れたらまた皆怖がっちゃうもん！」

小磯良子も同じく出てきた。

「お前らを止める気はねえが、三人で一人にかかるつもりか？ 俺はそんなの嫌だぜ」

「私もできればね。でも本気の北野君が相手なら私達三人でも危ないところよ」

「確かに、北野さん相手なら俺や児島やばか女一人ずつはきついところか……」

「だから、ばか女っていうのやめてくれない？」

「くるぞ」

北野君が襲いかかった。

「いくぞ北野！」

始めに児島猛が北野君に素早い左ジャブを連打した。児島猛の拳がわずかに北野君の頬や髪の毛を何回かかすった。北野君のよけたところを竹久が狙おうとするが拳が空振りしてしまう。

「最初にあつた時よりも動きが良くなったね児島さん。気を抜いていると」

実は児島猛。北野君に負けてから密かにボクシングのトレーニングを行うようになっていた。いつか借りを返そうと思っていたのだ。

「そう簡単に避けられながら褒められても嬉しくないがな」

ひゅん

小磯良子が北野君の脚を払うように蹴るが、北野君は瞬時にそれを読み、かつ児島猛に鋭い膝蹴りを放った。

がこん

北野君の体重の載った膝蹴りが児島猛の顎をとらえた。児島猛は一撃で倒れた。

「助走も付けずに児島猛の顔面まで届く飛び膝蹴りを放ったか。流星の瞬発力だな」

「感心している場合か！」

解説する幾乃に竹久がツツコミを入れた。

一方、碧空高校の校門に二人の男がやってきていた。小磯良子、北野誠一郎の父親二人だった。

「北野の父親か。何の用できた？」

「私の息子が暴れ回っていると聞いて会社を早退してきました」

「私も同じく悪魔が校内を暴れ回っていると連絡が来て店を閉めてきた。娘が心配だからな」

二人は互いに意を決して校内へと入っていった。